

「国民文学」の問題¹

三原 芳秋

◆「若し朝鮮に新しい文学が興るなら・・・」——李光洙の「覚悟」

1940年8月、文藝統後運動朝鮮・満洲班に参加した小林秀雄は、帰国後『文藝』誌上で中島健蔵と「時代の考察」という大仰なタイトルの対談²をする。冒頭、満洲・朝鮮のことを尋ねられた小林は、林房雄と行なった講演会が京城でも新京でも大入りだったことなどを話したあとで、やや唐突に李光洙の名前を出す——「今度朝鮮では、李光洙さんに会った。そんなに深く話もしなかつたけれど、まァ僕の見たところでは、ちゃんとした人だね、しつかりした人だね」。そして、李光洙の転向にかんして、日本人の転向は「内輪の話」に過ぎないが、朝鮮人の場合は「余程深刻なもの」で「いろいろ僕等には解らぬ辛い事情があると思ふ」と同情的な発言をする。続けて——

若し朝鮮に新しい文学が興るなら、率先して打開の途を拓かうと覚悟した人から起る。他は駄目だ。それから諺文の問題だが、僕は、たゞ諺文がいいか、悪いか、といふことを抽象的にとり上げて論じたつてはじまらぬと思ふ。それはもつと大きな問題の一部だからね。全体の歴史がどういう風に動くかといふことで決る。解決は時間の手にある、時間だけの手にある。(85頁)

この発言に対し、対談者の中島は、アイルランドの例を持ち出して「運命的に、二重に言葉をもつといふ處」といった話題をふるが、小林に一蹴される。

結局さういふ議論も抽象的なものではないかね。例へば諺文の問題から直ぐ愛蘭の文学といふものを連想する、さういふ考へ方ね。さういふ風に諺文を政治と文学との十字路に置いて思索を巡らしても結局どうなるものでもない。僕は、李光洙なんといふ人が現れたといふ事実だけを信ずるのだ。何とかして打開を講ずる、その人が自ら行ふその行ひに興味を集中するのだ。それが、僕の建前だ。あとは知らん。(85-6頁)

一見共感的な発言だが、実のところ、小林の論点がどこにあるのかがよくわからない。いや、むしろ、論点が故意にはぐらかされている。「諺文の問題」は「抽象的」であり、「もつと大きな問題の一部」であるとは、どういうことだろうか。植民地朝鮮の文学者にとって、文学の「用語問題」ほど、具体的で切実なものはないのではなかろうか³。さらに、「もつと大きな問題」すなわち「全体の歴史」の動向に身を任せろ、というのはどういうことだろうか。つまるところ、理屈ぬきで「歴史」(「大東亞共榮圏」「内鮮一体」といった歴史的現実)を「虚心に受け納れ」⁴ろ、ということではないか。その

1

本論考は、拙稿「崔載瑞のOrder」(『さい間SAI』(INAKOS国際韓国文学文化学会)第4号(2008)、291-360頁)における資料を中心とした研究を、理論的に代補することを目的として執筆されたものである。

2

『文藝』(1940年10月)、84-97頁。

3

たとえば、前年の『文学界』(1939年1月)に載った座談会「朝鮮文学の将来」における、朝鮮文学の翻訳(不可能性)をめぐるやりとりを参照。そこでは、朝鮮人作家に同情的な林房雄や村山知義が「内地語」で作品を発表することを促すのに対して、林和ほか朝鮮人作家の側の消極的な抵抗が見られる一方で、内地進出に積極的な張赫宙に対する半島在住作家からの微妙なあてこすりを聴き取ることもできる。このあてこすりへの憤慨がひとつの動機となって書かれたのが、張赫宙「朝鮮知識人に訴ふ」(『文藝』1939年2月)だということを考えると、この「用語問題」が単純な抑圧/抵抗モデルで説明のつくものではないことがわかるだろう。

4

この文藝統後運動の講演旅行で喋ったものと思われる「文学と自分」(『中央公論』1940年11月)において、小林は、「歴史」について以下のような考えを披瀝している——「歴史といふものを眺めて兎や角言ふ自分といふ様なものを考へるのは誤りである。僕らには歴史を模倣する事以外に何も出来る筈はない。刻々に変る歴史の流れを、虚心に受け納れて、その歴史のなかに己れの顔を見るといふのが正しいのである。日本の歴史が今こんな形になつて皆が大変心配してゐる。さういふ時、果して日本は正義の戦をしてゐるかといふ様な考へを抱く者は歴史について何事も知らぬ人であります。歴史を審判する歴史から離れた正義とは一体何んですか。空想の生んだ鬼であります」(『小林秀雄全集』(新潮社、2001)第7巻、144頁)。

うえて、「率先して打開の途を拓かうと覚悟」することを教唆する——これが、この発言が遂行する言語行為である。その共感的な態度および無責任さ(「あとは知らん」)によってぼかされているとは言え、これは有無を言わせぬ(「他は駄目だ」)暴力的な主体化=臣民化への「呼びかけ」以外のなにもでもない。

実際、「放言」を得意とする盟友の林房雄の方は、しばらく前に『文藝』誌が企画した「朝鮮文学特輯」のなかで、よりストレートに、より情熱的に、「呼びかけ」を行っている。「朝鮮の精神」と題するこの小論⁵において、林房雄は、「私は朝鮮文学を読みはじめて、朝鮮の精神を知った。それは健康であり、純粋であり、豊かであり、高貴であつた」と、典型的なオリエンタリスティックの形容辞を畳み掛ける形で、まずは熱烈な賛辞を贈ったうえで、「朝鮮文学は内地文学の悪い部分の影響を拒否することにつとむべきである。守りとはして来た精神の純粋さによって、逆に内地文学に反省を与へてくれることを、内地文学者の一人として私は望む」と、極めて共感的な、こう言ってよければ「善意に満ちた」見解を示している。しかしながら、すぐ後の段落で、その善意の正体がゆくりなくも明らかになる——

朝鮮語の問題に就いても、お互ひに性急でない方がよからう。私は内地語論者で、朝鮮の作家が全部内地語で書く日の来ることを望んでゐるが、性急にそれを主張することはやめる。遠き将来でかまはないのだ。朝鮮に於ける内地語は急速に普及しつつあるから、現在の小学生が大人になる頃には、言語の問題に就いても新しい事態が生れるであらう。日本は朝鮮の征服者ではない。朝鮮の精神と文化の伝統を正しく強く生かす方向に言語問題も解決されなければならぬ。この問題に就いては、朝鮮語を知らぬ私は多くの発言権はない。言語と文学が不可離なものであるだけに、朝鮮文学者諸氏の悩みは深いことと思ふ。(195-6頁)

またしても「朝鮮文学者諸氏の悩み」への共感と、「新しい事態が生れるであらう」といった婉曲な表現による「歴史」のおしつけである。そして、この短文をしめくくる林の期待には、文字面だけをながめれば、今で言う「ポストコロニアル理論」のお手本のような響きさえある。

そのうちに、内地語で書いて、しかも内容的に内地作家を凌ぎ、文体や格律に於ては、朝鮮語の長所をよく生かしてゐるが故に、内地作家よりも豊富且つ絢爛だといふやうな作家が現れるやうになつたら〔、〕新しきアジアの文学のために、愉快この上ないのである。(196頁)

朝鮮語抹殺の単なる恫喝ではなく、共感と善意に満ちた「呼びかけ」であるからこそ、「率先して打開の途を拓かうと覚悟した人」には主体的に応答しやすいものとなる。それが、ポストコロニアル的論理(被抑圧者に残された、なけなしの「主体化」論理)と親近性のある意匠をもつものであるからこそ、正当化の論理を求める植民地知識人には同調しやすいものとなる。そして、その主体化の意志が、まさに、臣民化(統合の論理)と不即不離の関係にあるという意味において、この「呼びかけ」は、はな

はだ狡猾なものであり、それへの真摯な応答は、結果的に、見るも無残なものとなる。

小林の「呼びかけ」に直接応えるかたちで寄稿された李光洙の「行者」⁶は、「小林先生」を宛名とした私信の形態で書かれた、自らの「日本精神の修行」を報告する文章だが、「朝鮮人を、日本人にまで引上げることの他に、朝鮮人の生路はないものと看破した」この朝鮮を代表する文学者は、「朝鮮人が日本人になるには——本物の日本人になるには、まず従来の朝鮮的な心を、根こそぎ棄て、かゝらなければなりません」(83、85頁)と、常軌を逸した「覚悟」を吐露している。その上で、卑屈にもさらなる「呼びかけ」を求める——

このことに関してあなたに相談があるんです。相談といふよりもお願いですね。あなた一つ朝鮮の人たちに呼びかけてくれませぬか。「おい朝鮮の兄弟たち、一緒にならうや」と。そして手を差延べて下さいませぬか。(86頁)

「行者」という文章の最大のアイロニーは、まさにこの「呼びかけ」られるべき「名」にある。修行に励む若者たちのなかで、「すでに日本的な氏名を名乗ったからには、元の朝鮮的な姓名は忘れよう」と言って、かたくなに「旧姓名」を明かすことを拒む「上田」という人物(おそらく李泳根)のことが賞賛の意をこめて報告されているのだが、その報告者自身の名前「香山光郎」の横には「(李光洙)」と「旧姓名」が付記され、さらに雑誌の目次にいたっては、ただ「李光洙」とだけ記されている。つまり、「率先して打開の途を拓かうと覚悟」して「本物の日本人になる」と心に誓った「香山光郎」も、内地人からは「元の朝鮮的な姓名」で「呼びかけ」られる運命にあるのだ⁷。主体化＝臣民化を求める最初の「呼びかけ」に応じてはみたものの、こちらが求める第二の、平等への「呼びかけ」は決してやってはこないのだ。

◆ 内地の「国民文学」

そもそも李光洙の創氏改名は、小林と出会う半年ほど前、皇紀2600年の紀元節を期して実施された創氏改名に真っ先に呼応して、その日のうちになされたのだ。香山光郎となった李光洙は、その直後に『毎日新報』に寄せた「国民文学の意義」なる短文(署名は号の「春園」)において、「一日でも早く皇民化されればされるほど、朝鮮民族には幸福がくる」⁸と断言し、「国民文学」＝「皇民文学」建設へのまい進を呼びかけている。小林秀雄が「若し朝鮮に新しい文学が興るなら・・・」と謎かけをした、その答えは、まさにこの「国民文学」のことであったのだ。

「国民文学」と聞いてすぐに思い浮かぶのは、1951年に竹内好が提唱し、「戦後最大の文学論争のひとつにまで発展したにもかかわらず、その成果は極めて不毛であった」⁹と総括される一連の論争であろう。その背景に同年調印されたサンフランシスコ講和条約があることは、当時からよく自覚されていた。「独立」によってアメリカ合州国への従属体制がこの時確定したわけだが、当時使われていた「この被圧迫民族としての日本民族の問題、被圧迫民族からの解放という私たちに課せられた客観的な課題」¹⁰

6

『文学界』(1941年3月)、80-87頁。

7

創氏改名をめぐる、強制の実態や「差異化」の現実については、水野直樹『創氏改名—日本の朝鮮支配の中で』(岩波新書、2008)に詳しい。また、内鮮一体論に同調した植民地朝鮮知識人の「差別からの脱出」願望と現実の齟齬については、宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』(未來社、1985)、第4章を参照。なお、「同化」のもつ複雑なイデオロギー素を、日帝統治下台湾における国語教育の精緻な分析を通して論じた卓抜な論考に、陳培豊『「同化」の同床異夢』(三元社、2001年)がある。

8

『毎日新報』1940年2月16日。林鍾国(大村益夫訳)『親日文学論』(高麗書林、1976)、284頁に引用。

9

前田愛「国民文学論の行方」、『思想の科学』No. 91(1978)、30頁。

10

永平和雄「国民文学の問題」、日本文学協会編『国民文学の課題』(岩波書店、1955)、85頁。

などという修辭には隔世の感が否めない。いずれにせよ、「国民文学」の問題とは概して、「国民」の主体化をめぐる問題と直結して、「国民」定義の不在や曖昧性が強く自覚される時にきまって、その(再)定義=統合のために発動されるイデオロギーだと言えるだろう。実際、西川長夫によれば、本格的な「国民文学」論の嚆矢は明治30年(1897年)の高山樗牛の論文であるが、それは「国民」/「非国民」の境界線引きと直結するものだったのである¹¹。

11

西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』(柏書房、1999)、30-34頁。

この観点からすると、アジア・太平洋戦争中にも「国民文学」論争があり、それが1937年頃に始まり1940年末にピークを迎えた、という事実は興味深い。平野謙による「中日戦争の勃発と前後して、『日本的なるもの』の究明が国民文学論という焦点にしばられたのは一応必至であらう」¹²という見立てに誤りはないだろうが、あえて補足するならば、中国の予想外の抵抗=団結を前に「民族国家」という概念があらためて「発見」されつつあった、という側面もあるのではないだろうか。しばしば小林秀雄の「日本回帰」を示すものとして挙げられる『東京朝日新聞』での「文藝時評」は、1936年12月25日から29日にかけて5回にわたって連載されたものだが、その第2回には、のちに「国民文学」論争の仕かけ人として活躍することになる浅野晃の小論「文化の擁護」をとりあげている¹³。小林がとくに関心を示しているらしい浅野の見解を引用すると――

12

「太平洋戦争下の国民文学論」、『文学』(1955年2月)、2頁。

13

「伝統の制約性―浅野晃氏の「文化の擁護」」、『東京朝日新聞』1936年12月26日。

われわれが強調したいのは新しい創造力は単に階級からは生れないだらうと云ふことである。階級は民族と結合しなければならぬ。階級と民族との結合のみが一切の危機を解決する力を有つてゐる。ソヴェート聯邦を見るがい。あれを単なる階級国家と考へるほど危険な考へはない。あれは同時に亦た民族国家でもある[。]少なくとも日一日と民族国家的自覚を深めつゝある¹⁴。

14

「文化の擁護」、『新評論』創刊号(1936年)、79頁。

「国民」意識に乏しくつねに瓦解の危機にあると目されていた「支那」や「ソ聯」といった東アジアにおける対抗勢力が、こちらのお株を奪うかのように「日一日と民族国家的自覚を深めつゝある」という認識から、民族国家=国民主義の競合関係のうちに「国民」主体の再定義=統合が要請され、その一翼を「国民文学」論が担うことになった、と分析することもできるだろう。実際、小林の「文藝時評」の横では、同年同月12日に起きた西安事件以降、国共合作に向かう情勢の推移を大々的に扱う記事が紙面ににぎわしていた。

その後いったんは下火になりかけた「国民文学」論が、1940年末にわかに文壇ジャーナリズムをにぎわした背景には、いうまでもなく、近衛新体制運動がある。主要文芸各誌はこぞって1940年11・12月号に「国民文学」をめぐる座談会や特集を組んだが、『文学界』(11月)の座談会はその名も「文学と新体制」で、その最終盤、やや唐突な林房雄の「これから、国民文学とは何ぞやといふことをやらうよ」というかけ声のもと、とりとめのない「国民文学」談義をしている。新体制下の制度的な要請もさることながら、ここでもまた「国民」主体の再定義=統合という観点から、この「国民文学」論ブームを分析できそうだ。日中戦争が解決不能の状態に陥り、太平洋戦争の足音が近づく中で、1940年秋から翌年春にかけての抗争の結果、革新派の影響力は決定的に後退し、皇道主義・超国家主義のヘゲモニーが確立する¹⁵。このような情勢下で、

15

詳しくは、米谷匡史「戦時期日本の社会思想―現代化と戦時変革」、『思想』(1997年12月)、69-120頁を参照。

次の「世界史」的な競争相手である英米帝国主義に対抗するために独自の普遍主義＝「帝國的国民主義」¹⁶を確立するという要請が、「(帝)国民」主体の再定義＝統合、ひいては「国民文学」論の隆盛へとつながったといえるだろう。

内地文壇における「国民文学」論争についてまだまだ議論をしたいところだが、本論考の主題である半島文壇の方へと先を急がなければならない。その前にひとつだけ注目しておきたい事実がある。それは、内地での「国民文学」論争において一貫して中心的な役割をはたした浅野晃は、日本浪漫派の論客であり「保田與重郎の完全なエピソード」¹⁷とも呼ばれるのであるが、その浅野には「転向者」そして「アジア主義者」の顔もある、ということだ。共産党中央委員候補だった浅野は、三・一五事件(1928年)はからくも逃れるが、その直後に検挙される。翌年、佐野・鍋山に4年先駆けて転向し、水野成夫らによる「日本共産党労働者派」(「解党派」)の結成に参加する。その後1935年暮、岡倉天心『東洋の理想』にめぐりあい、日本回帰する¹⁸。のちに南方徴用作家としてジャワに派遣された浅野は、『東洋の理想』のマレー語訳を現地新聞に載せるなど、「アジアはひとつ」の理想にもとづく皇民化政策遂行に情熱を燃やしたという¹⁹。浅野の「国民文学」論を考えると、1940年にめだって現われるようになった「私の言ふ国民文学運動といふのは、文学に於ける第二の尊皇攘夷運動である」²⁰といった極端に日本主義＝特殊主義的な言説に目を奪われがちだが、それがさまざまな普遍主義(マルクス主義、アジア主義)と補完関係にあったことも、決して見逃してはならないだろう。浅野の1936・7年の議論が、封建社会を脱した西洋近代の勃興する市民文学を範とする「近代主義」的傾向をもっていたのに対し²¹、1940年末の議論では「日本主義」的言説がめだつことをもって、普遍主義から特殊主義への後退という図式化に短絡するならば、酒井直樹が論ずるような「帝國的国民主義」における普遍主義と特殊主義との野合のメカニズムを見落とすことになるだろうし、さらに重要なことに、その野合が原理的に成立しえない植民地にこの言説が「移植」された際に生起する諸問題を見抜くことができなくなるだろう。

◆「オリンピアの場は閉鎖されてしまった・・・」——崔載瑞の「勇氣」

1940年末の内地文壇での「国民文学」論ブームは、すぐに半島文壇にも波及した。「波及」という表現は、あまり適切ではないかもしれない。先に引用した李光洙の「国民文学の意義」(1940年2月16日)はブームに先立つものであるし、さらにいえば、朝鮮文学史においては、1926・7年頃に、プロレタリア文学に対抗するかたちで「国民文学論」の台頭がみられた²²。無論、1920年代半ばと1940年とでは、「国民」という名辞の意味・範疇に決定的断絶があることは言うまでもない。簡略化していえば、前者における「国民文学」とは「(朝鮮)民族文学」と等価であったものが、後者においては「帝国文学」であり、「読者は半島二千万ではなく一億の全国民であり、十億の大東亞諸民族であることがその理想である」²³ということになる。とはいえ、これも、「内鮮一体」下の「皇国臣民」としての朝鮮人にとっての話であって、復古的色彩の強い内地における「国民文学」論を通覧すればすぐにわかるとおり、そちらでの「国民」とは「大和

16

酒井直樹『希望と憲法—日本国憲法の発話主体と応答』(以文社、2008)、3・4章を参照。

17

平野前掲論文、4頁。

18

浅野晃・影山正治『転向—日本への回帰』(暁書房、1983年)を参照。

19

神谷忠孝「南方徴用作家」、『北海道大学人文科学論集』第20号(1984)、5-31頁。

20

「国民文学運動私見」、『文学界』(1940年12月)、34頁。

21

興味深いことに、浅野は、そもそも「国民文学」論を書き出したきっかけとして、高倉テルの名前を挙げている(『国民文学論』(高山書院、1941)、96頁)。これはあきらかに高倉テル「日本国民文学の確立」(『思想』1936年8・9月)を指しているが、当該論文において高倉は(独特の言文一致体を駆使しつつ)史的唯物論の観点から「国民文学」を産業革命と直結させ、「国民文学」(プロレタリア文学の母胎だ)(下、337頁)と喝破している。浅野の「国民文学」論も、初期の段階(1936・7年)においては、資本主義の発達史という遠近法のなかで論じられている(「現代日本の『西洋と日本』—『日本的なもの』の問題の所在に就て」、『改造』(1937年6月)など)。のちには、浅野自身、初期の西洋近代主義的傾向を自己批判している(前掲『国民文学論』、91-2頁)。

22

池明観『韓国近現代史—1905年から現代まで』(明石書店、2010)、170頁。

23

崔載瑞「朝鮮文学の現段階」、『国民文学』(1942年8月)、14頁。

民族」だけを指していることに疑いはない。つまり、1940年代植民地朝鮮における「国民文学」とは、朝鮮における過去の「国民文学」および内地における同時代の「国民文学」という双方の「民族文学」から二重に切断された、特異な「(帝)国民文学」となることが予想されることになり、その意味でも、ここでいう「波及」は、必然的に重層決定されるものとなるだろう。

24
『人文評論』(1941年1月)、49-55頁。

25
『文学界』(1940年5月)、164-170頁。

当時の植民地朝鮮文壇を牽引していた両輪の一方である『人文評論』主幹の崔載瑞は、1941年新年号においてさっそく、韓植に「国民文学の問題」²⁴を書かせている。韓植は前年『文学界』に「朝鮮文学最近の動向」²⁵を寄稿している、いわば双方の「事情通」である。韓植の「国民文学の問題」自体は「問題」提起というよりは「紹介」に近いもので、浅野晃の言説を中心に内地発「国民文学」論を要約するものにすぎないが、議論の典拠として引用する浅野の文章が、直近のものではなく(浅野自身が自己批判している)初期の「近代主義的」な議論(ゲートを典型とする、封建社会から脱した西洋近代の勃興する市民文学論)であることには注意してもよいだろう。このような「迂回」にくわえ、紹介文を通じて「国民文学」の主体=主語がどことなく一般化・曖昧化されていることも、この「移植」にともなう困難を物語っているようだ。

26
巻頭言「国民士気の問題」、『人文評論』(1941年2月)、4頁、拙訳。

この頃から、巻頭言や論文における崔載瑞の文章に「国民」というタームが頻出するようになる。しかし、その多くはスローガ的な要素が強く、まだ「理論」のレベルには到達していないようにみうけられる。たとえば「大きな国民的協同体のなかへ積極的に参与し、時代全体の空気を呼吸するとき、その文学は国民士気を助長する文学になるだろう」といったものだ²⁶。たしかに「国民文学」のあらたな理論は形成されてはいないが、その一方で、それまで崔載瑞が提唱・指導してきた文学・文化理論が、「歴史」の重みによって押しつぶされていくさまを感じとることができる。

27
前掲「崔載瑞のOrder」。

崔載瑞が提唱・指導した「主知主義文学理論」の一貫した理論的歩みについてはすでに詳細に分析しているので²⁷ここでは繰り返さないが、そこで筆者が見出した「Orderを最終審級とする『主体化』の理論」とは、別の言い方をすれば、「個」-「普遍」を軸とする主体性構築の理論である。すなわち、外在的ドグマにより普遍性を僭称するプロレタリア文学理論や民族文学理論の(似非)普遍主義を批判し、あくまで主知的・批評的な「個」に立脚しつつ、内在的に普遍的「基準」を構築し、その基準に従って「個」の「主体化」を図る理論である。朝鮮文壇における崔載瑞の出世作である「諷刺文学論」において「文壇危機の一打開策」として提案された「自己諷刺」理論の根拠が、「人生ですべてのものを失ったとしても、万が一その失望を解剖し、その虚無を暴露し、その無価値を冷笑する理智力を持っているならば、彼はいまだに彼自身の主人である」²⁸という一見「敗北主義」的ともとらえられうるものであったことは、以上のような図式によってはじめて理解されうる。すなわち、たとえ植民地状況において一般的な「主体化」の契機を奪われているにしても、自己を「解剖」する行為を通じて、少なくとも、その「理智」的=「普遍」的行為のagentとしての主体性だけでも確保しようという、なげなしの試みなのである。

28
「諷刺文学論一文壇危機の一打開策으로서」IV、『朝鮮日報』(1935年7月20日)、拙訳。

この「個」-「普遍」の図式が、「国民文学」論に取り組みにおよんで微妙な翳りを見せはじめる。1941年4月号に自ら執筆した巻頭論文「文学精神の転換」には、印象的なくだりがある――

文学にかぎっていても、個人が人類的立場に立って、もっぱら独創性のみをもって文化的創造に寄与するという近代的観念は、それ自体の真偽を問わず、これからは許容されないことが予測される。いわば、諸民族の文化的選手が集まって、その創造的能力を競技するオリンピアの場は閉鎖されてしまったのである。そして、そのような能力が、もう少し具体的でもう少し切実な、民族の生存と国民の営為に裏付けられることが要請されている。²⁹

29
『人文評論』(1941年4月)、9頁、拙訳。

「それ自体の真偽は問わず」というところに、「個人」-「人類(普遍)」の「理論」を完全に否認するわけではないという矜持が見え隠れするが、いずれにせよ、時局(すなわち「歴史」)の要請に従い「これからは許容されない」という判断が示されている。「個人が人類的立場に立」つような、「個」-「普遍」の「オリンピア」が閉ざされてしまった以上は、「国民」という「種」を機軸とした「文学精神」への「転換」という飛躍を決行する「勇気」を持たなければならない――

〔朝鮮文学不振の〕原因は勿論、事態があなどれないものだ、ということにある。時局を目標とするものだと言って、一時的な彌縫策へむかってはならないし、やはり、文学の持つ永遠性に立脚して、その国家的使命を宣揚しなければならないだろう。そうするためには、緻密な理論的追求も必要だろうが、また勇気が必要だ。断絶を乗り越えて新しい歴史的創造へと飛躍する人にいつも必要な勇気を、われわれもまた要するということである。³⁰

30
巻頭言「転換의自主性과自覚性」、『人文評論』(1941年4月)、3頁、拙訳。

「国策文学」といった「一時的な彌縫策」を退けつつ、「文学の持つ永遠性」といった普遍性への信頼をかりうじてつなぎとめているとはいえ、「国家的使命を宣揚しなければならない」と宣言する崔載瑞には、そこに理論的一貫性が確保できないことはわかっていたはずだ。「諷刺文学論」より一貫して、植民地状況下における朝鮮文学の「打開策」を理論的に模索してきた崔載瑞だが、ここにきて必要なのは「飛躍」する「勇気」であると予感するに至る。小林秀雄が李光洙について語った予言が不気味に反響する――「若し朝鮮に新しい文学が興るなら、率先して打開の途を拓かうと覚悟した人から起る。他は駄目だ」。

◆「国民文学」という問題

論文「文学精神の転換」は、以下のように締めくくられる――「こうして、文学精神の転換は、国民文学の要件を探索するところへとわれわれを引導する。この問題については、次の機会に考えてみることにする」(10頁、拙訳)。しかし、「次の機会」は先延ばしになる。『人文評論』は、『文章』ともども、総督府主導の雑誌統廃合のため、本号をもってあっけなく廃刊となったのだ。その後半年ほどの準備期間を経て『国民文学』が、崔載瑞を編集兼発行人として1941年11月に創刊される。「結局は最初から当局の国策宣伝誌として出発した」³¹と後世には評価される『国民文学』も、当初は「年

31
林鐘国前掲書、51頁。

四回国語版、八回諺文版」を予定していたが、まもなく国語版のみの雑誌となり、文字通り「親日派」の機関誌となる。

しかし、である。ここまで「彼自身の主人」という矜持を持ち続けてきた理論家・崔載瑞が、それほど簡単に「国策宣伝」の一機関に甘んじて身を墮したと考えてよいのだろうか。それが、その名も「国民文学」という「半島唯一の文化雑誌」にコミットした崔載瑞の「勇気」なのだろうか。たしかに「国民文学」とは、新体制下の内地文壇で一時的に流行したものの「移植」であり、ことによると総督府関係者におしつけられた名称かもしれない。しかし、崔載瑞が「国民文学」運動に主体的にコミットするにあたって、「朝鮮」／「日本」という二項対立図式には収まらない、いわばその斜線に位置する「国民」を横領(appropriate)する契機は、まったくなかったのか。それは、「国民」=「日本人」という等号に切断を持ち込む斜線でもあり、内地文壇で流行した「国民文学」論になんらかの「認識論的切断」をもたらす契機をはらんでいたのではないか。その意味で、崔載瑞は「問題」³²としての「国民文学」を案出したのではないか。

『国民文学』創刊号に、いわばマニフェストとして崔載瑞が発表した論文は、『人文評論』の最後のことを意識してか「国民文学の要件」³³と題されている。その冒頭第二段落は、次のような調子である。

国民的と云ふ文字を無造作に考へる人も困るが、然しこの際国民文学を余り偏狭に考へるのも禁物である。国民文学はこれから国民全体がかつて築き上げなくてはならない大いなる文学である。今から垣を作つて狭く閉ぢこもる必要はない。殊に或る限られた事柄を限られた方法で書かないと国民文学にならないやうに考へるのは実は国民文学の前途を過まるものである。国民文学は須く高い目標と広い範囲を持つべきである。中心に国民的背景さへしつかりしてゐれば無理に小さく固める必要は無いではないか？ (34頁)

ここには、すでに「国民的と云ふ文字」を、意識的に拡大解釈しようとする姿勢がうかがえる。実際、この論文のなかでは「国民文学」とは「これから築き上げられるべき文学」(35頁)であることが再三強調され、作家には「国民を形作るために書くと云ふ激しい意欲」(40頁)が求められる。「国民」とは、まさに「来るべき」ものであり、これから制作されるべきものなのだ。内地文壇において「国民文学」が大和民族の復古的な民族文学として語られているまさにその時に、同じその名称を未来に投企される(より普遍的な)「(帝)国民文学」へとパフォーマンス³⁴に読み換えているのである。そのような文脈で崔載瑞が「我が国の現状」を語るとき、「国民」は濫喩化される³⁵——

翻つて我が国の現状を見るに、未だ政治的段階の域を越えないとは云へ、東洋新秩序の建設と云ひ、大東亜共栄圏の確立と云ひ、何れも人類史に新紀元を画すべき大理想であつて将来必ずや国民意識の中に体系付けられるであらう。そしてそれが無限の価値の源泉となるであらう。茲に於いて国民意識は価値意識に依つて裏付けられ、澆測として芸術心を刺激するであらう。(36頁)

32

「問題」については、戸坂潤「問題」に関する理論(『戸坂潤全集2』勁草書房、1966)、ルイ・アルチュセールほか(今村仁司訳)『資本論を読む』(ちくま学芸文庫、1996)などを参照。

33

『国民文学』創刊号(1941年11月)、34-40頁。

34

「ある用語によって慣習的に排除されてきた人々が普遍を主張するとき、しばしばある種のパフォーマンスな矛盾を生産することになる。しかしこの矛盾は、ヘゲル流に言えば自己抹消ではなく、その概念自体の幻影的な二重化を明らかにするものである。さらにそれは、普遍を主張する正当な場所がどこにあるのかについての相矛盾する推測を促すものである」(ジュディス・バトラー (竹村和子訳)「普遍なるものの再演 —形式主義の限界とヘゲモニー」、『偶発性・ヘゲモニー・普遍性 — 新しい対抗政治への対話』(青土社、2002)、60頁)。

35

ここでは主にスピヴァクによる理論化を念頭に「濫喩」(catachresis)という表現を用いたが、同様の現象を、車承祺は「過剰」戦略と定式化している(「抽象と過剰 — 日中戦争期・帝国／植民地の思想連鎖と言説政治学」、『思想』(2008年1月))。

無論、これは帝国のプロパガンダの受け売りで、植民地朝鮮の知識人が「我が国」と言ったところで、その言説の醜悪さは増しこそすれ減じられるものではない。しかし、さきほどの植民地朝鮮の作家がむしろ率先して「国民を形作るために書く」という宣言と重ね合わせてみると、本来的には特殊であるはずの「国民」を「人類史」的な普遍性の方向へと開く「横領」の意志を垣間見ることができないのではないだろうか。

実際、崔載瑞の普遍性への志向ならびにその主体的な理論化への意志は、創刊号の中心に位置する座談会「朝鮮文壇の再出発を語る」³⁶における京城帝大教授・辛島驍との微妙な駆け引きのうちにうかがうことができる。当時朝鮮文壇で行われていた「ローカルカラー」論に話題が及ぶと崔載瑞は、単に「ローカルカラー」を擁護するのではなく「ローカルカラー」・「特殊性」と言ったものには「不満足」であるとし、「朝鮮文学の独創性」という観点を打ち出す。辛島は「独創性」など不要だと話を遮ろうとするが、崔載瑞は自説をさらに敷衍して以下のように立論する――

日本文化の一翼として朝鮮の文学は再出発する。そうすると今までの日本文化それ自体がやはり一種の転換をやっているわけです。もっと広いものになるわけです。さうすると今までに内地的文化になかった或る一つの新しい価値が朝鮮文化が転換したことによって附加される。さういうことがなければ、本当の意味はないと思ひます。(78頁)

ここでも辛島は「今日に於いて朝鮮的なものを日本文学に特別に追加しようとする意識を強調する必要はないと私は思ふ」と聞く耳を持たないのだが、崔載瑞はその言葉尻を捉えて、さらに「私はそれを意識するだけではなくて出来得べくんばそれを理論化しなければならぬと思ふ」(79頁)と表明する。ここにはっきりと、崔載瑞の念頭にある朝鮮文学「再出発」――「国民文学」横領――のプログラムを読み取ることができる。すなわち、もはや朝鮮文学の自律的な「打開」を望めないという現状を認めた上で、一方で辛島の強要する高圧的な同化の暴力に抗しつつ、また他方ではヘゲモニーの消費に供する「特殊性」論も退け、あくまで朝鮮文学に「独創的」な「価値」創造能力を期待し、それを「国民文学」として「理論化」していこうというものだ。しかもその際に、かえって「日本文化それ自体」に「一種の転換」を要請し、いわば「国民文学」という普遍のもとに、「日本文学」「朝鮮文学」という特殊をともに止揚することを「呼びかけ」しているのだ。

翻って、このように考えることもできるかもしれない。そもそも崔載瑞の「主知主義文学理論」は、英米モダニズム文学理論のうちに普遍的な「基準」を見出し、それにもとづいて「個」-「普遍」を軸に(似非)普遍主義を排撃するという図式を持っていた。その図式が時局の圧力によって成り立たなくなり、「国民文学」という「種」の論理がおしつけられるにおよんで、それを(李光洙のように)丸呑みするのではなく、あくまでその「種」を「普遍」の方向へと読み換えようとしたのだ、と。そう考えるとき、崔載瑞の以下のようなさげない感慨は、ある種の「真実」の重みを持ってくる――

36
『国民文学』創刊号(1941年11月)、
70-90頁。

私も学校に居る時分に外国文学の理論ばかりやりましたが、学校を出て文壇に携はつて見てどんな問題にぶつかつても学校で習つた理論で説明がついたので。ところが一応国民文学に携つて見ると、何一つ定見がない。国民文学とは何ぞやといふことについては一言も教へられなかつたのです。これ程徹底した外国文学教育はないと思ふのですが、かういふことにぶつかつて見ると全然見当がつかない、結局自分で切開いて行くより他ないといふ結果になるのです。³⁷

もちろん、座談会での発言を、あまり真に受けるのは賢明ではないだろう。ましてや、「親日派」知識人の代表格が、在鮮内地人御用作家(田中英光)や帝国軍人(浅井中佐・馬杉少佐)を招いての座談会で弄した発言などに、ある種の「真実」を見出すことなど馬鹿げているかもしれない。しかし、万能に思っていた「外国文学の理論」を放棄してもなお、また別の普遍的「基準」としての「国民文学」論を「自分で切開いて行く」理論家の意志を、この発言のうち見ることができないだろうか。これこそが、崔載瑞の「勇氣」だったのではないだろうか。

この座談会はそもそも、植民地朝鮮における徴兵制実施の発表を受け、それを言祝ぐために開かれたもので、その大半は内地人の軍国主義的な発言が基調をなし、それに朝鮮人知識人の側が同調するというものだった。それが最終盤にいたって「国民文学と外国文学」に話題が移ると、朝鮮人文学者たちの発言が活発になり、上に引用した崔載瑞の発言となる。その後しばらくして、牧洋(李石薫)から、保田與重郎が「大和民族の一つの血の純潔を護る」といった「余り偏つた考へ方」を持っていることへの懸念が表明されると、崔載瑞は、「余りにする必要はないと思ひます。内地に居る批評家や作家は知らないのです。つまり念頭にも上らないのです」と内地における「国民文学」論の「見そこない」の事実を確認したうえで、以下のように発言する――

ここで、「コンタクト・ゾーン」の生みの親であるメアリ・ルイズ・プラットが紹介する、1929年に出版されたヴェネズエラの小説のある挿話が思い出される。その小説の語り手は、「タバコやパイナップルやサトウキビとおなじく、ロマン主義もカリブ生まれで、それをジョゼフィーナ・タシェ [ナポレオン皇妃ジョゼフィーヌ] がヨーロッパに持ち込み、その疫病をナポレオンの軍隊が、シャトーブリアンの援助もあって、ヨーロッパ中に撒き散らした」という自説を展開する。この「ロマン主義カリブ起源説」について、プラットはこうコメントする――「西欧人は、自由・個人主義・リベラリズムといったロマン主義のプロジェクトが、ヨーロッパから植民地周縁へと流出したと考えるのに慣れっこだが、逆に、コンタクト・ゾーンからヨーロッパへと流入したなどとは、なかなか思いつくものではない」(Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes*, 2nd Ed. (2008), p.135, 拙訳)。まさに、このようなポストコロニアル的発想の転換こそ、崔載瑞が提出した「国民文学」という「問題」だったのではないだろうか。

そこは我々がやらなければならぬ。現に日本の政治は既に満洲に於て試験済みのことをやつてある。文化でも産業でも何でも自惚ではないが自信を持つべきではないかと思ひます。寧ろ革新的文学は京城あたりのものと思はなければならぬ。(52頁)

政治において満洲で「試験済み」のことを内地ひいては帝国全体に適用＝「逆植民」(東畑精一)しているように、文学においては京城でまず「革新」を起こし――「日本文学」／「朝鮮文学」とは切断された問題機制に属するパフォーマンスな普遍性をもつ「国民文学」を創造し――それによって「日本(語)文学」全体を変容させ、百年後、二百年後には、「国民文学は京城から始まった」と言われるようになる³⁸。…そんなヴィジョンを、崔載瑞は抱いていたのではなからうか。(無論、日帝統治が百年、二百年続かなかつたのは幸いだったし、今から思えば当然のことだが、当時そのような「歴史」判断ができなかつたとして、いったい誰が責められよう。)そして、そのようなヴィジョンは、今日の世界で(事後的に)「ポストコロニアル文学」と呼ばれるものと、極めて親和性の高いものと言えるだろう。であるならば、ポストコロニアル文学が従来の日ショナル・リテラチャーに「認識論的切断」をもたらしたのと同じ意味で、崔載瑞の

「国民文学」運動も、ある種の「切断」の契機を持っていたと考えられるのではないだろうか。

とはいえ「契機」はあくまで「契機」に留まり、「国民文学」という「問題」は雲散霧消する。「国民文学」が実質的には抹消記号のもとに置かれ、結局のところ崔載瑞の理論的主体＝主語が(T. S. エリオットの伝統論を梃子にして)「朝鮮文学」から「日本文学」に「転向」した(と物語られる)「悲劇」のプロットについては、すでに前掲別稿で詳細にわたって議論しているのだから、ここではその「悲劇」の結末へと先を急ごう。つまるところ、「国民文学」という「問題」が、「パフォーマティヴな矛盾を生産する」普遍性にかかわる「問題」であるとするならば、それに「解答」を見出すことは、その「問題」の所在そのものを(週及的に)抹消することになるだろう。ところが崔載瑞は、最終的に、この「問題」が実は「簡単明瞭」なものであったと観念し、その「明確なる解答」を、李光洙が早々と到達していた「本物の日本人になる」ということに見出すことになる――

問題はいつも簡単明瞭であつた。――君は日本人になり切れる自信があるか？この質問は更に次のやうな疑問を起した。日本人とは何か？日本人となるためにはどうすればよいのか？日本人たるためには、朝鮮人たることをどう処理すればよいのか？

これらの疑問はもはや、知性的な理解や理論的な操作だけではどうにもならない、最後の障壁であつた。然しながらこの障壁を突き抜けない限り、八紘一宇も、内鮮一体も、大東亜共栄圏の確立も、世界新秩序の建設も、総じて大東亜戦争の意義が判らなくなる。祖国観念の把握と云つても、それらの疑問に対する明確なる解答を持たぬ限り、具体的、現実的とは云へない。

こゝで私自身の体験を述べよう。私は昨年の暮頃からいろいろと自己を処理すべく深く決意し、元旦にはその手始めとして、創氏をした。そして二日の朝、そのことを奉告のために、朝鮮神宮へお参りした。大前に深々と首を垂れる瞬間、私は清々しい大気の中に吸ひ上げられ、総ての疑問から解き放たれたやうな気がした。³⁹

39
石田耕造(崔載瑞)『まつろふ文学』、『国民文学』(1944年4月)、5頁。

こうして石田耕造となった崔載瑞は、絶対者の前に深々と首を垂れ、「問題」を「解答」にすりかえたのだった。

◆ 普遍性の足枷

我々の創造力の足枷の一つは「^{ユニヴェルセル}普遍性」への強迫観念であつた。植民地被支配者の古き症候群。彼は自分がおとしめられた存在以外の何者でもなくなることを恐れているが、それでいて、自分の主人のようになりたいと思うことを恥じている。だから――屈折に屈折したあげく――主人の奉じる価値がこの世界の理想の価値だと考えることを認めるのだ。そこから我々自身にとっての外在性が始まる。(『クレオール礼賛』)

金允植は、李光洙と崔載瑞の変貌を「論理の放棄と信念の獲得」としてまとめてみせた。その上で、いち早く「信念」を獲得した李光洙に対して、崔載瑞のそれにずいぶんと時間がかかったことの理由を付度している――

40

金允植(大村益夫訳)『傷痕と克服 一韓国の文学者と日本』(朝日新聞社、1975)、64-5頁。

ほかでもなく、知性論を一身に背負ってきた英文学の常識が身についたかれとしては、一直線に国策に野合できなかつたからである。かれは自分が少なくとも主体性のない追随主義者ではないと自負していたのではないか。(中略)しかし、最後まで合理的知性をもってしては時局をうけいれることができなかつた。かれはついに知性と論理を放棄し、信念と態度をもって対置させてしまったのである。ここに崔載瑞の悲劇が集約されている。⁴⁰

41

アリストテレス『詩学』第13章を参照。

この「悲劇」には、強・弱二様の解釈が可能だろう。まず弱い解釈としては、これを人間的な悲劇とみて、時代に翻弄された一個の知性が、その能力ゆえの可能性を抱きながらも最終的に人間的な弱さを露呈し時代に屈服する、という物語が考えられる。強い解釈としては、個々の人間性とは無関係に、必然性に導かれた(古代ギリシャ的な)悲劇が考えられる。もし後者だとするならば、いったいその悲劇を導いたハマルティア(ἀμαρτία)⁴¹は、なんだったのだろうか。

42

この二世代のあいだにエドゥアール・グリッサンが入る。ドゥルーズ+ガタリの「リゾーム」に接続するグリッサンの「〈関係〉の詩学」は、(起源)やそれにもとづく(普遍性)をかるやかにかわしつつ、独自の(全体性) Tout-Mondeを描き出す。『クレオール礼賛』の筆者たちが思想的先達と認めるグリッサンが、「クレオール性」をも固定化され本質化されていると批判することは注目に値する。

筆者は、そこに「普遍性の足枷」をみる。本節冒頭に掲げた『クレオール礼賛』の一節にある「『普遍性』への強迫観念」という足枷である。この一節が批判の対象としているのは、あきらかにエメ・セゼールその人であろう。セゼールは「ネグリチュード」の旗手として、(幻想の)「アフリカ」にもとづく普遍主義によって「西洋」の普遍主義の虚偽性を告発しながら、自らは端正な普遍的言語(フランス語)を駆使し、文学言語としてのクレオール語に否定的だった。しかも、マルティニークを代表する政治家として「海外県化法案」の可決に寄与し、植民地状況を固定させてしまった。『クレオール礼賛』は、息子世代による「パパ・セゼール」=父親殺しの記録である⁴²。息子たちは告発する――「クレオール文学は『普遍性』を揶揄するだろう、すなわち、そういう形に姿を変えた西欧的価値への帰依、自分自身を透明にしておもうとする気遣い、明証性の晴れ間に自分自身を委ねる態度を揶揄するだろう」⁴³。

43

ジャン・ベルナベ+パトリック・シヤモワゾー+ラファエル・コンフィアン(恒川邦夫訳)『クレオール礼賛』(平凡社、1997)、81頁。

筆者はなにも、崔載瑞がクレオール戦略を採るべきだった、と言おうとしているのではない。(いったい誰が、いかなるポジションナリティから、「べきだ」などと言えるだろう。)それは事後的にのみ判定されうることであろう。ただ、たとえそのような戦略のオプションがあったとしても、崔載瑞の「理論」は決してそれを採用しなかつたのではなからうか、と思うのである。崔載瑞の「理論」は、徹頭徹尾「『普遍性』への強迫観念」という足枷をはめられていたのではなからうか、と。

ここで「足枷」と呼ばれているものは、実は「武器」だと見ることもできる。実際、その「武器」によって、崔載瑞は李光洙よりも長く踏ん張ることができたのではないか。しばしば、植民地朝鮮における外国文学研究は、「西洋」という普遍に直接することによって「日本」という似非普遍を乗り越える手段であったと議論される。たしかに当人たちの意識にも、そのような志向があった可能性は高いと思う。しかし、帝国日本の「帝國的国民主義」が、英米帝国主義との競合関係において独自の普遍主義をうち

だし、その普遍性の根拠は「天皇」という「絶対者」であるとの主張をおしつけてきて、しかも日に日にその統一的主張の外部が失われていくのだとしたら、どうなるだろう。「『普遍性』への強迫観念」にとりつかれた「理論」は、その「理論への意志」が強ければ強いほど、「普遍性」を詐称する「絶対者」——それは「天皇」かもしれないし、「共和主義」かもしれない——に、最終的には帰依する運命にあるのではないだろうか。「武器」だと思っていたものが、実は、はじめから「足枷」だった、ということにはならないだろうか。

バリバルは、「多義的な普遍性」を腑分けして、「叛乱 (insurrection) 」に結びつくような「理念〔理想〕的普遍性 (ideal universality) 」を導き出している。それは「本性からして複数的である。その意味するところは、『相対的』ではなく・・・むしろ、つねにすでに、単純または『絶対的』なあらゆる統一を超越しているため、永遠に紛争の源であり続けるということである」⁴⁴。「絶対的」な統一の誘惑に抗しきれず、「永遠に紛争の源であり続ける」——つねにすでに「問題」である——ような「理念〔理想〕的普遍性」以外の普遍性を志向し、しかもその志向が強迫観念にまで至るならば、必ずなんらかの「普遍主義」に絡めとられることになるだろう。これこそが「『国民文学』の問題」、すなわち、崔載瑞が提出した「国民文学」という「問題」は抹消される運命にあるという問題——それは植民地状況における「理論」の問題であり、ことによると近代一般の問題かもしれない——の核心ではなかろうか。

44

Etienne Balibar, *Politics and the Other Scene* (Verso, 2002), p.173. 拙訳。ここでバリバルは、「理念〔理想〕的普遍性」をデリダの「幽霊」とむすびつけているが、むしろ、ドゥルーズの論じる「問題」としての《理念》(『差異と反復』第4章)との近似が認められる。